

研究集会

－保存科学研究集会－

昨年度に引き続き、埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会を1996年2月9日、平城宮跡資料館講堂で開催した。今年度は「保存・修復をとりまく諸問題」を大テーマとして、出土金属器に焦点を絞り、現状と問題点について講演と討議をおこなった。

田辺昭三教授（京都造形芸術大学）の特別講演「保存科学に望むもの」では、自然科学分野と人文科学系の分野との連係の深化が、研究成果の質量をきめる重要な鍵となることが強調された。同時に、文化遺産を保護するという観点から、「遺物の保存科学」から脱皮して「保存科学を遺跡の修景・保存へ」と積極的に挑戦すべきことを提言された。引き続き、「鉄さびの構造」「海外における防錆処理」「江差町開陽丸遺跡出土の鉄製遺物」「脱塩処理の現状」「出土鉄製品の脱塩処理」「金属遺物の脱塩処理」「日本における含浸樹脂の現状と課題」「新しい素材」「金属遺物の保存環境」「新しい遺物環境コントロール剤」の各テーマで10名の講演者により最近の研究成果が発表された。講演終了後にパネルディスカッションが行われ、各々のテーマについて活発な討論がなされた。なお今回の研究集会には約150名の参加者があり、保存科学に対する関心の深さを示していた。 (肥塚隆保・村上隆・高妻洋成)

－官営工房研究会－

1995年12月9日、第4回官営工房研究会を奈良国立文化財研究所本館小会議室において開催した。発表は宇野隆夫教授（富山大学）による「北陸における律令制的生産システム」と、渡辺晃宏による「官営工房の賃金支給システム」の2本で、15名の参加を得た。

これまでの研究会は、百萬塔工房、宮都付属瓦工房、写経所など、中央の手工業の各分野ごとに、個別実証的な分析を進めてきた。今回はやや視点を変え、地方工房と中央工房の一事例としての造東大寺司工房とを総合的に対比することを意図した。しかし、宇野報告では、北陸の各種手工業の検討だけでなく、それを支えたシステムを集落遺跡との関連でとらえる新視角が提起され、渡辺報告では、これまで問題になった賃金支給方式についての新見解が提起された。そのため両報告を総合化・対比する当初計画は捨て、提起された新見地を中心にそれぞれ討論を深めた。当研究会も個別実証をふまえて、全体を通覧する総合化へと飛躍しようとしている。今回はその第1ステップである。なお、今回の集会の記録は『官営工房研究会会報4』(1996年12月)として公刊済である。 (上原真人)

－完新世における北方モンゴロイドの展開－

従来、伝播論的パラダイムの中で、考古資料・植物民族学の資料から、日本の基層文化における北方系要素の存在が指摘されることが多い。しかし、具体的に先史時代の北アジアの動向をふまえた上の論の展開は少ない。そこで、特にテーマを完新世以降に絞り、考古学と関連分野の成果を合わせ、北アジア先史社会について議論する研究集会を開催した。関連分野では風間伸次郎（言語学）が北アジアに広く分布するツングース諸語の音韻対応からの考察、石田肇（人類学）が頭骨の形態小変異に基づく北アジアの古人骨の概要、佐藤孝雄（動物考古学）がオホーツク海沿岸部の先史文化におけるイヌの2類型について報告した。考古学では、小畠弘己が埋葬から見た東シベリア新石器時代社会の考察、白石典之が北アジア新石器時代の年代上の問題点を報告した。報告をふまえ、言語学・人類学の集団の形成・移動仮説と考古資料との対応、北・東アジアの新石器時代編年の問題点について討議を行った。 (臼杵 熱)

—現生人類起源仮説を石器から考える—

本研究集会は新人アフリカ起源説の検討を目的として、1996年2月16・17日に行った。まず形質人類学の百々幸雄（東北大学）が現生人類起源仮説の現状と問題点について報告した。これを中期旧石器の分布と変遷から検討するため、考古学の西秋良宏（東京大学）が西アジア、森本晋がヨーロッパ、白石典之（新潟大学）がシベリア、加藤真二が華北地方、柳田俊雄（郡山女子大学）が日本列島の事例について報告した。さらに討論を経て、以下の成果を得た。
①ヨーロッパにおける入れ替わり説は極端であり、縄文人と渡来系弥生人との間のようなソフトな混血を考える方がよい。
②新人アフリカ起源説は東・南アジアには当てはまらず、地域内進化と考えるのが妥当である。
③ムスチエ文化のルバロア技法はモンゴルまで拡散したが、さらに南や東へは直接浸透しなかった。その主体者がネアンデルタール人か、現代型新人かは不明である。
④ミトコンドリアDNAによる起源研究は、他分野の研究によってクロスチェックされるべきである。

(佐川正敏)

—生物高分子考古学研究会—

1996年2月9日、奈良国立文化財研究所本館小会議室において、考古資料に残る脂質（脂肪酸）分析、DNA分析の研究会を開催した。参加者は23名で、中野益男（帯広畜産大学）、小林正史（北陸女子短期大学）、藤田邦雄（金沢市教育委員会）、小山陽造（八戸工業高等専門学校）、石黒直隆（帯広畜産大学）、杉山洋らの発表に基づいて討議を行った。討議では新しい分析によって従来の常識を覆される考古学の側の生半可な知識に基づく反論が印象に残った。近年、考古学における自然科学の応用が盛んで、新しい成果が次々と得られ、従来の説に反する場合が多くあるが、どのようにその齟齬を検証するか、互いの研究の姿勢が問われることを実感した。

(松井 章)

—遺跡の建造物復原方法の研究—意義と課題の検討—

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段ではあるが、まだ歴史が浅いこともある、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等を行うことによって、問題点、課題を整理し、今後の復原整備事業のあり方の方法をさぐるものである。本中真（文化庁記念物課）、江面嗣人（文化庁建造物課）、吉岡泰英（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の第1年次で、復原整備の実態調査を行った。事業主体、行政、設計監理、学術研究の各立場の担当者から現況をきく研究集会を1回開催するとともに、秋田県の城輪柵等10ヶ所の復原現場を調査した。

(村田健一)



保存科学研究集会



「竪穴住居の系譜」シンポジウム

－古代都城制研究集会 第1回「古代都城の儀礼空間と構造」－

古代都城の発掘成果は、ここ10年で膨大な蓄積があり、これまでの都城に関する知見を大幅にかえ、次の段階へ踏み出すための総括と、理論化にむけた模索が必要となっている。その準備段階として、調査担当者が、各都城に関する最新の成果を共通認識として持ち、問題点を整理する必要があると思う。こうした観点から、所内外の協力を得て都城制研究集会を企画した。

都城制の研究は問題点が多岐にわたるので、焦点がばやけないよう課題ごとに検討する必要がある。この会は第1回目として、古代政治史を再構成する上に重要な宮中枢部を取り上げ、これまでの調査成果のまとめと、その意味を考えることにした。日時は1996年1月20日（土）・21日（日）。会場は平城宮跡資料館講堂。集会の報告集として、『古代都城の儀礼空間と構造』を刊行した。（金子裕之）

－日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムⅠ「竪穴住居の系譜」－

1995年の11月30日～12月1日の両日にわたり、表記のシンポジウムを開催した。会場は平城宮跡資料館講堂で、約30名の専門家のみによるクローズド・セッション形式のシンポジウムとした。発表者と内容は以下の通りである。

SESSION 1 日本の竪穴住居

- 報告1 宮本長二郎（東京国立文化財研究所）「竪穴住居の類型と変遷」
報告2 大塚昌彦（渋川市教育委員会）「土屋根をもつ竪穴住居～焼失家屋の語るもの」
コメント 工樂善通・岡田英男（奈良大学）

SESSION 2 極東の竪穴住居

- 報告1 大貫静夫（東京大学）「考古資料からみた極東の竪穴住居」
報告2 佐藤浩司（国立歴史民族博物館）「民族誌からみた北東アジア・北アメリカの竪穴住居」
報告3 浅川滋男「黒龍江ナナイ族の竪穴住居」
コメント 佐々木史郎（国立歴史民族博物館）・佐川正敏

SESSION 3 中国・朝鮮半島の竪穴住居

- 報告1 田中 淡（京都大学）「中国の穴居～類型と展開」
報告2 西谷 正（九州大学）「松菊里型住居の分布とその意味」
コメント 岡村秀典（京都大学）・都出比呂志（大阪大学）

総合討論

1996年度は、ひきつづき「平地住居と高床建物～掘立柱建物をめぐる諸問題」と題するシンポジウムを開催する予定である。（浅川滋男）

－東南アジア考古学の現状と課題－

当研究所においても、アンコール文化遺産保護共同研究事業や、特別研究南アジア仏教遺跡の研究などの進展に伴い、東南アジア各国の歴史や文化財の現状に対する基本的な知識が必要とされるようになってきた。こうした問題意識のもと、表記の研究会を1996年1月21日、奈良国立文化財研究所本館小会議室において開催した。

まず菊池誠一（都宮大学）がベトナム考古学の現状を紹介し、ベトナム考古学の時期区分と、各時期の概要の説明、ベトナムを代表する代表的な遺跡・遺物の紹介をスライドを用いて行った。次にタイ建築史について、成田剛早（稲田大学）がタイ各地における古建築の様式と変遷の概略に関する報告を行い、あわせてタイ芸術局による遺跡の修復と整備事業の現状を紹介した。（杉山 洋）